

京都教区時報

京都教区広報委員会
(編集長 村上透磨)

京都教区本部事務局
京都市中京区
河原町通三条上る

TEL 075-211-3025

FAX 075-211-3041

honbu@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp> 4345

2022年 司教年頭書簡

コロナ時代を生きる信仰Ⅱ

キリスト者の終活を始めよう

カトリック京都司教 パウロ大塚喜直

はじめに

今年の年頭書簡は、『コロナ時代を生きる信仰』の具体的なヒントとして、「人生の終わりのための活動」、いわゆる『終活』を取りあげます。日本社会が急速に少子高齢化に向かう中、こども世代や周囲に迷惑をかけずに人生を終わりたいと考える高齢者が増え、『終活』というものは、今をより良く生きるために有意義であると考えられるようになってきました。コロナ禍は現代人にとって、これまでの社会経済活動や個人のライフスタイルの是非を根本的に問う機会となっています。コロナ時代を生きるキリスト者として、より積極的な生き方への方向づけとして、聖書に基づいた『終活』について考えてみたいと思います。以下、文中の『終活』は、常に「キリスト者の終活」を指します。『終活』など早すぎると思う人は、『終活』を、『生・活』、つまり今を「生」きる「活」動のヒントとして参考にしてください。



1
2022

1. いのちを豊かに受ける

「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」(ヨハネ10・10)。イエスのことばを受けて、いのちを「豊かに受ける」とはどんなに素晴らしいことなのか、と期待を込めてわたしたちの『終活』を始めましょう。この世での世俗的な富や成功に恵まれる豊かさではなく、死を超えてあずかる永遠のいのちの豊かさです。パウロが言うように、それは、今は鏡におぼろに映ったものを見ているが、主の再臨の時には神と顔と顔を合わせて見ることになり、今は一部しか知らなくとも、その時には、自分が神に知られているように、わたしがはっきり知ることになるものです(Ⅰコリント13・12参照)。

そこで『終活』の最初の作業は、わたしの記憶に溜まったものを引き出すことです。天の国のことを学んだ学者のようになり、自分の倉から新しいものと古いものを取り出します(マタイ13・52参照)。古いものとは神の愛を拒んだ苦しい出であり、新しいものとはイエスの呼びかけに応えた福音の体験です。イスラエルの民は、出エジプトの出来事を思い起こし、記念する度に、民の不従順に対する神の忍耐強い導きに感謝し、来るべき救いの完成を待ち望んでいました。わたしたちの記憶の整理も、過去の自分に誠実に向き合いつつも、心は未来に向けて、積極的に明るく生きる意欲と希望をかき立てるように行います。



2. イエスの父の家が待っている

『終活』のひとつの目的は、神の愛と恵みをうけて生きてきたことへの感謝のうちに、自分がこの世に生まれてきたことの意味を確かめることです。イエスは最後の晩餐で、「わたしの父の家には、住むところがたくさんある」(ヨハネ14・2)と言われましたが、この家とは、父と子と聖霊の三位の神が交わる(天にある永遠の住みか)(Ⅱコリント5・1)です。そこには、すべての人が例外なく招かれていて、誰もがその人らしく、その人しか味わうことのできない神との交わりにあずかっているとわたしは想像します。



このイエスの父の家にたどり着くまで、御父は御子を通して、一人ひとりのための弁護者・助け主としての聖霊を遣わしてください(ヨハネ14・15・21参照)。わたしたちは、この聖霊のおかげで、わたしでしか生きることのできない、わたし自身の人生を築いているのです。わたしの人生の意味や価値を、他人のそれと比較しても意味がありません。人は皆、他人によって置き換えることのできない、わたしでしか達成できない人生の意味をこの世で生み出すために、生まれてきたのだと思います。《世界で一つだけの花》となるために。

3. 安息日を心に留めよ

『終活』では自分の死と向き合うことになりませんが、それは死ぬことの準備のためではなく、時間を超えた永遠の〈安息〉に向けて、心を広げていく歩みとして考えます。「安息日を心に留めて、これを聖別せよ」(出エジプト20・8)という主の十戒は、創造主である神のわざには目標があることを想起させます。聖書全体は、「初めに、神は天地を創造された」(創世記1・1)の句で始まり、「然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください」(黙示録



22・20)と、主の約束とわたしたちの嘆願で終わります。

ダビデは、「主はわたしの羊飼い。わたしは乏しいことがありません。主はわたしを緑の牧場に伏させ、憩いのみぎわに伴われます」(詩23・1〜2参照)と、〈安息〉を憩いとして歌いました。イエスは、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのものに来なさい。休ませてあげよう。…そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」(マタイ11・28〜29)と、永遠の〈安息〉を約束してくださいました。

天地創造の目標は、神と人

とが顔と顔を合わせてともに住む至福の世界です(創世記2・1〜3参照)。そのために神は、時間の中で、救済史という手段を用い、アルファでありオメガであるキリスト(黙示録1・8参照)の再臨によって、創造の業を完成されます。宇宙と世界の歴史も、わたしたちの人生にも終着があり、万物は〈安息〉のうちに憩います。わたしが生きている時間(人生)は、神がわたしのためにくり広げる神聖なドラマであり、〈安息〉という終幕に向かって展開されていきます。それまでの一瞬一瞬は、神の恵みを無駄にはならない〈恵みの時、救いの日〉(Ⅱコリント6・1〜2参照)であり、最後は100倍の実を結ぶという喜びが待っているのです(マルコ4・20参照)。

4. 信仰の完成者であるキリストを見つめて

パウロは晩年(60歳頃)になって、こう書いています。「わたしは、既にそれ(信仰による義)を得たのでもなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。…なすべきことはただ一つ、後ろのもの忘れ、前のものに全身を向けつつ、…目標を目指してひたすら走ることです」(フィリピ3・12〜14)。ですから、わたしたちも神の導きを信じて、信仰の〈創始者〉であり〈完成者〉であるキリストを見つめながら、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜くのです(ヘブライ12・1〜2参照)。

しかも、キリストは『終活』の同伴者でもあります。エマオへ向かう二人の弟子(ルカ24・13〜27参照)のように、人生の挫折や失敗を経験し、後悔の念を抱くようなときには、近づいてこられるイエスを引きとめて、一緒に歩いてもらい

ましよう。「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」(ルカ24・26)と、つまずきと目されたメシアの受難の必然性について、イエス自らが説き明かされたのは、神の救いの業は神秘であり、すべての出来事に意味があることを弟子たちに教えるためです。

コヘレトは、「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある」(コヘレト3・1)と語り始め、まず生まれる時と死ぬ時をあげます(コヘレト3・2)。そして、神のなさることはすべて時にかなって美しいとまで言ったあと、「それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない」(コヘレト3・11)と戒めます。ヨブは、一連の事が起こる前には「主は与え、主は取られる。主の御名はほめたたえられよ」(ヨブ1・21)と、自分の生死は神の支配のもとにあると認めてはいたので、神はヨブの思いが真実であるかどうかを試されます。ルカが記すように、マリアがすべての出来事を心に納めて、忍耐強く思いめぐらしていたように(ルカ2・19、51参照)、わたしたちも焦らずに、主への信頼のうちに『終活』を続けます。

5. 神の沈黙の意味を問う

『終活』では、神の沈黙を黙想します。(嘆きの詩編)と分類されている詩編では、神がともにおられるという臨在感と、神から見捨てられ、神がおられないと感じる不在感が交錯します。人は神の沈黙が続くと、自分の犯した罪に対する神の怒りか罰かと疑い、神の沈黙に耐えられなくなります。わたしたちは神を感情的に体験することを望んでしまいがちですが、神がわたしたちに求められることは、どこまでも神

を信頼することです。

マーガレット・F・パウーズの「あしあと」という詩では、夢の中で、主とともに渚を歩いていた作者の人生が映し出されます。砂浜には彼女と主のあしあとが並んで続くのですが、人生でつらく悲しいときに一つのあしあとしかなかったの、彼女は主に、「なぜわたしを捨てられたのか」と尋ねます。すると主は、「わたしはあなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。あしあとが一つだったとき、わたしがあなたを背負って歩いていたのだ」とささやきます。

ヨブは、一日にして財産も健康もすべてを失い、その悲痛な出来事の意味を神に問い続けながらも、何も答えない神の沈黙に落胆します。しかしヨブ記は、すべての体験は神の変わらぬ臨在を悟るためのものであり、人間の目線からのみ、神の働きを解釈してはならないという教訓を残します。

わたしたちが過去の苦しみと闇の記憶をたどるとき、それらがなぜ、わたしの身に起こったのかではなく、それらを通して、御父はどのようにわたしを愛しておられるのか、と問いたいと思います。



6. からだの復活を信じます

『終活』の根拠は、何と云ってもわたしたちの復活信仰にあります。「からだの復活を信じます」。これが信仰宣言の頂点です。死ぬことが恐ろしい、これは人間の普通感覚です。しかし、キリスト者はなぜ死ぬのかではなくて、なぜ死が恐ろしいものであるのかについて、パウロの書簡から学ぶことができます。それは、人類の罪のためです(ローマ5・12～6・14参照)。最初の人間アダムの罪によって、すべての人間が生まれつき罪の支配にあるとともに、死の支配の下にも置かれていたのです。罪とは、神に背き、神から離れ、自分を神として生きようとすることです。この罪の結果、神と人間との関係が断絶状態になりました。

しかし、キリストの受難と死によって、人間の罪は赦され、神との関係が回復されます。その結果、人間は死の恐れや不安から解放されて生きることができるようになったのです。パウロは言います。「一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです」(ローマ5・15)。そして、罪と死の支配にある苦しみの状態は、将来わたしたちが神の子となる栄光に比べれば、取るに足りないものなのです(ローマ8・18～19参照)。キリスト者は神からの無償の愛とあわれみによって生かされているという真理を信仰によって受けとめ、「キリスト・イエスに結ばれる洗礼」(ローマ6・3参照)によって、神の子とする霊の〈初穂〉(ローマ8・23参照)を受け、主とともに〈アッバ、父よ〉と祈る者とされています(ローマ8・15参照)。そして、この世の終わりに主キリストの復活にあずかり、永

遠のいのちを生きる復活のからだ(1コリント15・35～49参照)が与えられるのです。

7. わたしたちの今日この糧を今日もお与えください

人生の旅路の糧として聖体をいただくことは、キリスト者の最上の喜びです。イエスは「信じる者は、永遠の命を得ている」(ヨハネ6・47)と言われ、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」(ヨハネ6・54)と約束してくださいました。ただ、得ているといっても、わたしたちの救いは、〈既に〉と〈未だ〉の両方の側面があります。だからこそ、イエスは、苦しみや悲しみの多い人生の歩みに必要な糧として、ご自分のからだでわたしたちを養い、活かしてくださいさるのです。主の祈りの中で〈今日この糧を今日もお与えください〉と祈るこの糧は、主から日々いただくすべての恵みとともに、この世にいる間の〈今日〉に必要な秘跡の賜物なのです。

さらに、わたしたちは聖体の秘跡(エウカリスチア)を通して、時間を超越した神と結ばれています。洗礼によってキリストの死と復活にあずかり、聖体の秘跡を通して、復活されたキリストの天上のいのちに、この世で〈既に〉あずかって生きています。そう思うと、各自の人生の時間の総体は、ただの個人の活動の記録で埋められる箱ではなく、時間の中で神の永遠に触れている記



録でもありません。たとえ、わたしが、わたし自身の記憶を思い出せなくなったとしても、わたしは神の記憶に刻まれています。『終活』では、一刻一刻と流れていく時の連続の意識の中で、神とともに生きる永遠の〈今〉を味わいます。

8. 愛がなければ、わたしは無に等しい

『終活』では、人生がこうあるべきだという〈べき論〉から卒業します。金持ちの青年がイエスに「永遠の命を受け継ぐためには、何をすればよいでしょうか」(マルコ10・17)と尋ねましたが、救われるために何をすべきかの問いに、答えはありません。救いは、神からの無償の賜物として受けとるものです。青年に根本的に欠けていたのは、〈願望の世界〉と〈おきての世界〉とは別に、自由と喜びに満ちた〈愛の世界〉があるのを知らなかったことです。イエスは、この愛の世界に目覚めるため、財産を手放すように青年に勧めます。わたしたちも、愛の世界に生きることを妨害するものが何であるかを丁寧に探し、義務で神を愛する意識から解放されて、神の愛に自由に応える愛の生き方を深めなければなりません。

パウロが愛の賛歌(1コリント13・1〜13参照)で言うように、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、全財産を貧しい人々のために使い尽しても、誇ろうとしてわが身を死に引き渡しても、愛がなければ、わたしたちの人生には何の益もありません。信仰と希望と愛は、いつまでも残りますが、その中で最も大いなるものは愛です。だから、『終活』でこそ、愛の賛歌にある〈愛のリスト〉を日々思い起こし、実践しなければなりません。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分

の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」(1コリント13・4〜7)。

9. 私の心とを思い出してください

『終活』を行うわたしたちは、死んだら天国という楽園に行き、そこで幸せになるための〈待ち時間〉を過ごしているわけではありません。是非すべきことがあります。それは、神と人にゆるしを願うことです。だれでも、過去に犯した過ちを認めず、そのための言い訳を繰り返し、自分を正当化してきた〈未解決の思い出〉があるはずです。イエスの十字架の左右にいた二人の犯罪人の一人は、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ23・34)というイエスの祈りを聞いたとき、神を恐れ悔い改めて、イエスが御国の完成のために来られる時に、自分のことを思い出してくださいと願います(ルカ23・42参照)。するとイエスは、「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(ルカ23・43)と答え、この犯罪人の罪のゆるし、救いを約束されます。『終活』は、この悔い改めた犯罪人に起こったのと同じことを願う祈りの道です。

「目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」(1ヨハネ4・20)。主にゆるしを願うわ





たしたちが、兄弟姉妹へのゆるしを拒むことはできません。「わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします」という主の祈りのことば通り、実行しなければなりません。ペトロは言います。「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」(Ⅱペトロの手紙³・8〜10)。「終活」こそ、過去と未来のすべての出会いを清らかな愛の交わりにできる貴重な時間となります。これまで自分の力だけで生きてきたつもりが、多くの人に助けられてきた人生であったと分かれば、和解すべき人々に心を開くことができます。すでに亡くなった人や、もう直接会えない人には心の中でゆるしを願い、神からのゆるしを願いまししょう。

10. わたしの若さに喜びを与える神

誰もが高齢になると、体力の限界と身体的な機能の減退を感じますが、この現象はキリスト教の復活信仰から見ると、パウロが言うように、内なる若さのしるしと言えます。「たとえ、わたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます」(Ⅱコリント4・16)。「内なる人は、キリストにあって新たに創造され

(Ⅱコリント5・17参照)、日々キリストの背丈に成長し(エフェソ4・13参照)、栄光から栄光へと主と同じ姿に造りかえられていきます(Ⅱコリント3・18参照)。ダビデは、主が「驚のような若さを新たにしてくださる」(詩103・5)と賛美をささげます。昔のラテン語のミサでは、へわたしの若さに喜びを与える神に向かって(アド・デウム・クイ・レティフィカト・ユベントウテム・メアム)と唱える神への賛美でミサを始めました。わたしたちの内なる若さとは、神が与える若さであり、神はそれに喜びを与えてくださるのです。そして、内なる若さは、幼子のように神の国を素直に受け入れる謙虚な心に宿ります(マルコ10・14〜16参照)。イエスは、こどもを神の子の本来の姿を映すものとして示されました。なぜなら、こどもは愛を必要とし、無条件で受け入れられることを求め、周囲からの愛のみを求めます。イエスが言われる(小さな者)(マルコ9・42)であることこそ、人間にとって最高の価値なのです。現代のように効率、健康、成功が優先され、一方で弱者が差別され、敗者がのけ者にされる社会において、高齢になっても、「わたしは弱いときにこそ強い」(Ⅱコリント12・10)という聖書のことばをあかすことができます。

11. キリスト者のシンプルライフ

断捨離は、ヨーガの行法である断行・捨行・離行に対応して、新たに入る不要なものを(断ち)、すでにある不要な物を(捨て)、物への執着から(離れる)ことだと言われます。パウロは、キリストを知っていることのすばらしさのゆえに、他のいっさいのことを損失といい、キリストのためにすべてのものを失っても、それらを塵あくただと断言します

(フィリピ3・8参照)。この精神こそ、キリスト者の断捨離の極意です。イエスは、「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」と言われました(マタイ6・21)。富への執着と闘い、より多く欲することをやめ、虚栄心と自己中心的な人生観から解放され、心の中に貧しい人や弱い人の居場所を作ります。

パウロはテモテにこう教えます。信仰は「満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です。なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです」(Iテモテ6・6〜7)。『終活』において、主に信頼した満ち足りた心をもって、シンプリライフを目指します。わたしたちは、自分の持ち物の所有者ではなく、管理者であり、隣人のために用いることで、神の摂理に仕える者となります(『現代世界憲章』69参照)。いくつか必要な時のために何でも物を蓄えておく姿勢よりも、神の愛に留まるために何が大切かという優先順位を見直し、未来のすべてを神に委ねて、今この瞬間を生きる喜びに満足したいと思います。そうしてキリスト者は、「神の国と神の義を」(マタイ6・33)を求めて、「何をすることにしても、すべて神の栄光を現わすため」(Iコリント10・31)に行います。

12. 元后あわれみの母

聖母マリアがその人生の終わりに、肉体と靈魂を伴って天国にあげられたことを記念する「聖母の被昇天」のミサの集会祈願では、信じるすべての人たちの救いへの希望を表しています。聖母とともに永遠の喜びに入ることができるよう祈ります。ロザリオの〈栄えの神秘〉の第四の黙想でも、〈善き終わりを遂げる恵み〉(文語)を願います。また、寝る前には、

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(ルカ23・46)と唱え、最後にラテン語聖歌「サルヴェ・レジーナ」か、典札聖歌〈元后あわれみの母〉を歌います。

エデンの園を追放されたエバの子孫として、この地をさすらい、涙の谷から叫びをあげるわたしたちの旅路を守り、最後に御子の御顔を見させてくださいと祈ります。聖母マリアは、わたしたちが弱く傷つき、辱められ、のけ者にされ、苦しんでいるときには、わたしたちに寄り添い、御子に助けを求めてくださいます。

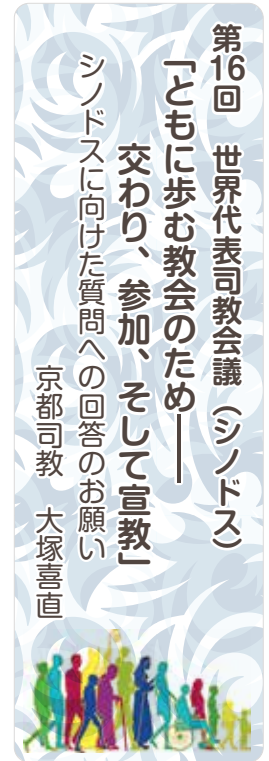
中世の修道士が交わしたラテン語の「メメント・モリ」(汝の死を覚えよ)という挨拶は、「メメント・ドミニ」(汝の主を覚えよ)と同じ意味でした。〈自分が死すべき人間であることを忘れるな〉ということは、〈常にいのちの主を忘れるな〉ということです。

コロナ禍で将来に不安を募らせているこの時代に、復活信仰を生きるあかしとして、キリスト者の『終活』を始めましょう。

「マラナ・タ(主よ、来てください)。主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。」

(Iコリ16・22〜23、黙示録22・20〜21参照)





2023年秋に開催される第16回のシノドス(世界代表司教会議)は、そのテーマが「ともに歩む教会」であることから、開催に向けての各国・各教区の準備がシノドスの一部として含まれています(使徒憲章『エピスコパリス・コムニオ』19〜21参照)。

そのため、京都教区も、ローマ教皇庁シノドス事務局からの質問に回答することになります。京都教区の回答はまとめて(日本語や他の言語のまま)、同シノドス事務局に送り、記録として保存されます。また、日本16教区の回答をさらにまとめたものは、日本司教団の回答として(英語で)、同じく同シノドス事務局に提出されます。

テーマの意味

教皇フランシスコは、この度のシノドスのために司牧的な特定のテーマを選ぶのではなく、教会の生活と宣教にとつて、その根幹となる『シノドス性』(ともに歩むこと)を選ばれました。

このシノドスに向けて全世界の教会は、ともに旅をし、これまでの旅をとともに振り返り、その経験を通して、どのようなプロセスが、教会の交わりを生き、人々の参加を実現し、宣教に自らを開くために役立つかを学んでいきます。

京都教区のシノドス担当部会

京都教区はシノドスの準備指針に従って、司祭、修道者、信徒からなる「京都教区シノドス担当部会」を設置しました。以下の方がメンバーです。任期は、2021年9月1日から、2023年秋シノドス閉幕までです。

鶴山進栄(京都教区窓口)

一場修、小立花忠、クエバス・フェリペ、福音宣教企画室

聖霊に耳を傾ける

シノドスの教会として成長するために、聖霊に耳を傾けます。

- 聖霊が、歴史の中で教会の旅をどのように導き、今日、わたしたちがともに神の愛のあかし人となるよう呼びかけているか思い起こす。
- ささまざまな理由で周辺に追いやられた人が、自分たちの声を聞いてもらえる機会を作る。
- 共同体の善と全人類の利益のため、霊のたまもの、カリスマの豊かさや多様性を評価する。
- だれもが、福音を宣べ伝える任務を果たすことができる参加型の方法を模索する。
- 福音に反する偏見や歪んだ慣習を明らかにし、それらを変えようと努める。
- 教会や運営する組織の中で、責任と任務がどのように機能しているかを精査する。
- 対話、いやし、和解、受容と参加、民主的構築、友愛の促進において、互いに信頼できるキリスト教共同体を維持する。
- カトリック教会共同体のメンバー間、キリスト教諸派、諸宗教共同体、市民グループや運動体など、教会と社会

のグループとの関係を深める。
●全世界、地域、国、教区レベルにおけるシノドス的な動きを評価し、活用する。

シノドスのための祈り

シノドスのための「祈り」があります。質問について、分かち合いをする前に、個人として考える前に、「シノドスのための祈り」などを祈り、聖霊の導きを願うことをお勧めします。

シノドスのための祈り

Adsumus Sancte Spiritus
聖霊よ、わたしたちはあなたの前に
立っています



聖霊よ、
わたしたちはあなたの前に立ち、
あなたのみ名によって集います。
わたしたちのもとに来て、とどまり、
一人ひとりの心にお住まいください。
わたしたちに進むべき道を教え、
どのように歩めばよいか示してください。
弱く、罪深いわたしたちが、
一致を乱さないよう支えてください。
無知によって誤った道に引き込まれず、
偏見に惑わされないよう導いてください。
あなたのうち的一致を見いだすことができますように。
わたしたちが永遠のいのちへの旅を続け、
真理と正義の道を迷わずに歩むことができますように。
このすべてを、

いっどこにおいても働いておられるあなたに願います。
御父と御子の交わりの中で、世々とこしえに。アーメン。

京都教区の皆さんへの質問

基本的な問いは、シノドスの教会が福音を告げながら「ともに旅をする」ということは、今日、わたしたちの教会の中で、どのような形で起こっているかという問いです。

以下は、「シノドス準備文書」にある10項目の質問です。

●小教区または施設・団体の方々の多くの意見を反映できる形で、意見収集してください。

●特に普段、意見を聴くことができない方々、声が届きにくい方々の声も反映させてください。

●10の項目すべてに回答する必要はありませんが、「ともに歩む」ことをそれぞれが置かれた状況で、どう生きていくかふり返ってみてください。すべての項目についての回答を網羅することを目指すのではなく、自己の共同体(団体)の状況に当てはめて、可能なかぎり多くのメンバーと分かち合いを行い、一緒に考えてください。

1. 旅の同伴者

皆さんの教会で、「わたしたちの教会」というとき、誰がその仲間でしょうか。逆に、どういう人、またはグループが、教会内外で、取り残されているのでしょうか。

2. 聴くこと

教会の内部で、また教会外の人々と、わたしたちの教会は、それぞれ誰に対し「耳を傾ける」必要があるのでしょうか。何が、耳を傾ける助けと妨げとなるのでしょうか。

3. 声に出すこと

わたしたちの生活の中で、また地域社会や団体の中で、福音の価値を公に表明する場面がありますか。そのために、何が助けと妨げになるのでしょうか。また社会に対して、誰が教会を代表して発言しますか。

4. 祝うこと

祈りと典礼において、信徒を含め、信者全体は、どのように参加しているでしょうか。参加は広がっているでしょうか、後退しているでしょうか。

5. 宣教における共同責任

皆さんの教会では、信仰教育や社会での奉仕活動の計画は、だれが、どのように決定しているでしょうか。誰が計画の実施を担っているでしょうか。その人たちは、どのように選ばれ、どのような養成を受けていますか。それ以外の人たちは、彼らを十分に支援していますか。

6. 教会と社会における対話

皆さんの教会では、そのビジョンや方針はどのように話し合わせ、決められていますか。近隣の教区、地域の修道会、信徒団体などと、どのような対話と協力をしているでしょうか。信者以外の一般の人々と、どういった対話、協力の経験がありますか。彼らから、どのようなことを学んでいますか。

7. 他のキリスト教諸派とともに

皆さんの教会は、他のキリスト教諸派の兄弟姉妹とどのような関係性をもっていますか。どういった分野に彼らは関心があるでしょうか。彼らとの対話の実りと妨げはなんでしょうか。

8. 目標設定と実現での責任と参加

教区や小教区の目標設定とその実現のためのプロセスは、誰が、どのように決定していますか。チームワークと共同責任は、どう実践されているでしょうか。信徒の参加はどうでしょうか。教区レベルでの共同決定・共同責任を実践する機関はありますか。その実りと妨げは何でしょうか。

9. 識別することと決断すること

皆さんの教会の決定は、どのような手順と方法で決定されているでしょうか。共同での識別が行われているでしょうか。

どうすれば、それらは改善できるでしょうか。透明性と説明責任を、どのように促進できるでしょうか。

10. 「シノドス性」(ともに歩むこと)の中で自己形成すること

皆さんの教会の中で責任ある役割を担っている人々が、互いに耳を傾け合い対話しながら、「ともに旅をする」教会がさらに成長し、共同で識別と決断ができるようになるため、お互いにどのような養成ができるでしょうか。何が妨げになるでしょうか。

回答書提出の締め切り

各教会、各団体・グループ等からの回答の提出は、できるだけ、2022年4月9日(土)までをお願いします。(司教団への提出のために)

ただし、京都教区のシノドスの歩みは続きますので、上記の締め切り以降でも、意見がまとまり次第、随時提出してください。京都教区のシノドスの歩みのために、それらの回答も生かしていきます。

信徒の皆さまへ

所属教会などにおいて、話し合いの機会が持たれますので、積極的にご参加ください。その前にまず祈り、10の質問にご自分で回答を試みてください。

2年もの年月をかけて行われるこのシノドスが、「ともに歩む教会のため」交わり、参加、そして宣教」という目的を果たすためには、一人でも多くの信徒の皆さまの参加が必要です。ともに歩んでまいりましょう。

広報委員会

大塚司教の予定

最新の情報は京都司教区のホームページにてご確認ください。



1月のお知らせ

教 区

広報委員会

お知らせに載せたい情報は、原稿締切り日までに教区本部事務局宛
メール/honbu@kyoto.catholic.jp または
Fax/075(366)6679に発信者のお名前を
明記の上お寄せください。

※ 3月号の原稿締切り日は1月24日(日)です。

本部事務局

司教年頭書簡 外国語版(英語版、スペイン語版、ポルトガル版、タガログ語版、韓国語版、ベトナム語版)は、京都教区のホームページに掲載しています。各小教区内や、まわりに必要な方がおられましたら、ダウンロードしてご使用ください。また、スマートフォンなどで右のQRコードを読み込むと京都教区のホームページから読むことができます。



点訳版「京都教区時報」〈無料〉ご希望の方は『カ障連大阪フレンドリー点字部』嶽崎(たけざき)裕子さんまでお申込みください。
Tel・Fax/079 (431) 8601

諸 団 体

京都カトリック混声合唱団

練 習：9日(日)、30日(日) 14:00

洛星宗教研究館

22日(土) 18:00

ミサ奉仕後 河原町教会聖堂

現在活動休止中。再開時、団員には連絡します。

問合せ：075(951)4283 則武 隆

コーロ・チェレステ(女声コーラス)

練 習：13日(土)、27日(土) 10:00

河原町教会 2階楽廊

問合せ：075(701)3303 岡田久美

心のともしび ラジオ番組案内

(全国34局で放送)

KBS京都 (月)～(金) 朝5:55

(土) 朝5:15

ラジオ関西 (月)～(金) 朝5:00

(日) 朝6:05

1月のテーマ「共生社会」

ホームページもご覧ください。

<https://www.tomoshihi.or.jp/>



感染症などによる行事の変更などは各団体
にご確認ください。



カトリック丹後教会・宮津教会堂「洗者聖ヨハネ天主堂」 京都府指定有形文化財指定のお知らせと献金をお願い

2021年11月5日付京都府公報に京都府教育委員会告示第8号として、宮津教会堂洗者聖ヨハネ天主堂が京都府指定有形文化財に指定されました。なお、指定名称は通称の「宮津カトリック教会聖ヨハネ天主堂」となります。聖堂修復にかかる資金のため、献金のご協力をお願いいたします。

— 聖堂修復募金の振込先 —

ゆうちょ銀行 口座番号：00990-2-238343

加入者名(受取人)：宗教法人カトリック京都司教区

この口座は「宮津聖堂洗者聖ヨハネ天主堂修復基金」
専用口座です。

